

①歌『白月』三木露風 作詞・本居長世 作曲

②トーク&演奏『月琴ってどんな楽器?』

③詩『月琴』小川未明 作

・・・休憩(約10分)・・・

④朗読音楽会『赤いろうそくと人魚』小川未明 作・吉田稔美 絵

⑤歌『砂山』北原白秋 作詞・中山晋平 作曲

♪月琴演奏曲目(編曲:永田斉子)

③『月琴』	「残月一聲」	神長瞭月	明治40年頃
④『赤いろうそくと人魚』			
	「漁業の歌」	小山作之助	明治29年
	「白蓮白菊」	作者不詳	明治33年
	「ねんねのやあや」	作者不詳	石川県の子守唄
	「寝入れよ、寝入れよ」	作者不詳	徳島県の子守唄
	「かなりや」	成田為三	大正8年
	「青柳」	作者不詳	大正5年
	「里ごころ」	中山晋平	大正12年
	「越来節」	作者不詳	沖縄県の民謡
	「籠の鳥」	鳥取春陽	大正11年

朗読作品について

『月琴』 『赤いろうそくと人魚』 小川未明 作

『月琴』は詩集『あの山越えて』(1914/大正3年)所収。小説『寂寥』の一場面を抽出する形で、改めて詩として編纂された。『赤いろうそくと人魚』の初出は1921(大正10)年東京朝日新聞。本公演では『定本小川未明童話全集1』(講談社・1976/昭和51年)を底本とした。

小川未明は『日本近代童話の父』と言われる。雅号「未明」は早稲田在学中、坪内逍遙に「ゲエテは美は黄昏にありといったが同じ薄明でも夜明けにしたらどうか。未明がよかろう」と言われてつけたという。児童雑誌『赤い鳥』発刊前の鈴木三重吉と語り合い、決意を述べる。「子供ばかりでなく、成人でも童心のある人に興味を持たれるもの、それが一つの文学革命になるのではないか」「この孤立した日本を救ってくれるものは、子供を描いてほかにないのです」(『童話を作って五十年』「文藝春秋」1951/昭和26年2月号より)

生涯に書いた1200編以上と言われる童話、その中でも傑作とされる『赤いろうそくと人魚』。発表されてから百年以上経つ今も、暗闇に投げかけられた灯火のごとく私たちの心を打つ。

「いずれにしても、この社会から、生きるための苦痛と、悲劇を、無くしたいものです。そのことは、決して不可能なことではない。人間の力によって、ある程度まで、なされるということをも信じるからです。」「貧乏線に終始して」（1930／昭和5年『常に自然は語る』所収）

●小川未明

1882（明治15）年4月7日生／1961（昭和36）年5月11日没。本年は没後65年となる。

歌曲について

『白月』 三木露風 作詞・本居長世 作曲

大正10(1921)年 初出『婦人の友』15巻9号／大正11(1922)年2月12日初演。
秋の夜の月の美しさを愛でる詩は、百人一首の大江千里「月みれば ちぢにものこそ
悲しけれ わが身一つの 秋にはあらねど」に通じる哀愁を伴う。

●三木 露風

1889（明治22）年6月23日生／1964（昭和39）年12月29日没

兵庫県生。詩集『廃園』が北原白秋の『邪宗門』と並び「白露時代」と称される。1918年（大正7年）頃から、鈴木三重吉の赤い鳥運動に参加し童謡の作詞を手掛ける。1921（大正10）年には童謡集『真珠島』を出版。「赤とんぼ」も同書に収録されている。

●本居長世

1885（明治18）年4月4日生／1945（昭和20）年10月14日没

本居宣長を祖先に持つ国学の家系に生まれる。鈴木三重吉編集の童話雑誌「赤い鳥」創刊を機に童謡運動が起こると、自身も齊藤佐次郎主宰「金の船」を中心に「七つの子」「赤い靴」などの童謡の名曲を数多く世に送り出した。。西洋の音階と日本の伝統的音階を巧みに融合させた作風で、“日本童謡の祖”と称される。

『砂山』 北原白秋 作詞・中山晋平 作曲

1922(大正11)年6月、北原白秋は新潟の童謡音楽会に招かれ、小学生たちから新潟にちなむ歌の注文を受けた。佐渡島を一望できる寄居浜に出向き、荒涼とした物淋しい光景から着想を得て詞を書き上げた。中山晋平へ作曲を依頼し、雑誌『小学女生』大正11年9月号に発表。

●北原白秋

熊本県生。1908（明治41）年、早稲田英文学会を離れ、詩人・洋画家らと「パンの会」を興し、翌年第一詩集『邪宗門』を刊行。1918（大正7）年には『赤い鳥』創刊に参加し、童謡部門を担当、多くの創作童謡を発表した。

●中山 晋平

1887（明治20年）3月22日／1952（昭和27年）12月30日没

多くの傑作といわれる童謡・流行歌・新民謡などを残した。作品は多岐にわたり、校歌や社歌等を含め中山の作品と判明しているものだけで1770曲存在という。